

教育実習指導

Guidance of the student teaching

坂東進(Susumu BANDO)

はじめに

この科目は、概念や理念を学習する部分は少なく、極論すれば教育実習に出かける際の事前指導としての注意事項で足りてしまう。しかし「教育すること」ことは事象や理念・概念ではなく、「すること」すなわち生徒と教師の間で行われるやりとりの「過程のありよう」を学ぶものである。そのため、教師はなぜせ意図に対してこういう姿勢で、こういう行動をするのか、またそれが「教育」業務のなかでなぜ必要とされるのかを体得する必要がある。そうしたねらいでこの授業を考えたい。

担当する教科によって教師の授業に対する構えは多少の異同を見せる。英語や地歴は事柄を通して概念理解を志向するが国語の場合、教えるべきあるいは生徒が覚えるべき事象はほとんどない。漢字とことばの意味を調べたら、国語の予習は終了する。英語のように多くの単語を調べ熟語を理解し、文構成をみて日本語に訳すなど、授業の事前に学習することは少ない。国語でも担当する教師によって新出漢字や語彙調べのほか、段落分けや梗概・主題などを事前学習の課題にするが、ともかく多くの国語科の教員は、古典を除いて事前学習に相当する予習の量を多くは要求しない。古文・漢文は英語に似るが、現代文は、教材によっては初読をよしとする場合もある。教師の教育に対する構えの違いは教科による教材の扱い方の違いによっても現れる。

英語や数学の場合、その教科を苦手とする生徒が多く、生徒が親しみやすい教材や教育方法の開発が必須の条件になりやすい。しかし国語の教え方で、生徒に親しみやすさを工夫するのは英語ほど重要ではない。国語は嫌いでもなければ好きでもない教科である。少なくとも国語を得意にする生徒は、他の教科に比べ多くはない。また得意とする生徒も国語の教科的内容を好むのはいても得意とするものは少ない。最近活字離れと称される現象で、活字を見ることを好まない生徒が増加しているが、これは国語科だけの課題でなく、活字を扱うすべての教科に共通し、国語を嫌う生徒は活字を読んだり書いたりすることだけでなく、書いてないことを想像する、行間を読むことを面倒がって嫌うのである。

国語は何を教えるかはっきりしない教科である。人間の生き様であったり思いであったり、評論であれば概念を分析し、具体化することで理解する。そして概念の具体化は文化や価値観で分類・分析される。こうして見ると国語の教師は人間に直截関わる授業を展開することになる。人間理解が要となる教科である。

愛知県の私立学校の教員新人研修で国語科と英語科の指導をしたが、英語の新人は生徒のモチベーションを上げるために、生徒が親しみやすい教材の開発に熱心で、国語の新人は学習態度に注目する。英語はツールを重要視し、そのことが、教育に向ける目の違いとなる。英語の場合、興味関心の持たせ方が最大関心事であり、これは英語の教員になったときの体験も含めてその重要さを認識するのだろう。

国語で何を教えるか、言語能力とか文化とか伝統とか言うが、実はこれは教え学ぶべき事柄ではない。特に文化や伝統と言われるものは教える人間自身が、それをどう理解し修得しているかが問われる。個々別々のもので「事柄」と言われる客観的事象ではなく、自身の個別の人間性である。自身の人間性をむき出しで

生徒と授業でやりとりをするものである。換言すれば人間的魅力を伝えるものである。例えば江戸時代の私塾を例に挙げると、日田にあった咸宜園は広瀬淡窓の人間的魅力で全国から書生を集め、近代になってからの教育制度にも多大な影響を与えた。咸宜園は淡窓亡き後も存続したが、他の私塾例えば吉田松陰の松下村塾は松陰亡き後存続しない。これは松陰の個人的魅力で塾が経営されたことの証左であり、亀田鵬斎の塾も寛政異学の禁以後、似た経過を辿る。咸宜園ですら事情で淡窓が講義をしない間、塾生が減少している。咸宜園は教育制度が確立しており、淡窓の遺訓も浸透していたので明治になっても存続が可能だったが、もともとこうした私塾は個人的魅力で経営されたのである。国語科はこうした私塾の伝統の名残がにおう教科の一つであると思われる。教育はもともと個人的行為なのだ。

国語で何を教えるかというとき、私は「去来抄」の「岩鼻やここにもひとり月の客」を例に引くが、作品は作者を超えた理解にある。その理解を支えるのは、読み手の理解と経験と教養であろう。去来を感得させた芭蕉の解釈は去来のそれをはるかに超えている。このことが前提で解釈や鑑賞の伝達は行われるが、芭蕉の偉大さを知る去来の受容と、多くの中高生たちとの受容の違いは国語教育の課題である。

私の高校時代「梁塵秘抄」の解釈で担当の教員、ベテランの女性教員であったが、この歌のよさを伝えるのに大変苦労し、指名した男子生徒を相手に手こずっていたが、この生徒が教員の言うことに納得せず、最後に「芥川龍之介はこの歌を大変褒めているのですが」と言う教員のことばに、「芥川は芥川で、僕は僕です」と反応した。私の高校時代の思い出であるが、解釈鑑賞は自分がどう思い、作品に感動できたかどうかだという考えが我々を支配している。もう一步進めて言えば、「作品に感動できたか」ではなく、「その作品が私をして感動させたか」にある。「私」先行であり、「私」がいて世の中が存在する。「我思う、故に我あり」であり、「我あり、故に我思う」という中世的思考から遠くにいる。「作品」が既に存在しそれを受容する「私」は「作品の美」に感動すべきであるという、古典的受容から乖離した、近代の国語教育の難しさの一面であろう。国語の教員が芭蕉ほどでなくても、生徒に対して十分偉大であればこうした現象は起きないであろうが、国語の教員に要求される人間性の陶冶である。

国語の教員は英語や数学の教員のように圧倒的学力で授業を進めるのではない。数学の教員は人間性もさることながら、「数学」の力で授業をする。生徒に高校における「数学」を教え理解させる。問題の解き方のノウハウをおしえる。それが教えられなければ「数学」教員は失格であるが、「数学」を分かりやすく教えられれば「数学」の教員としての資格は十分で、人間性や生き様を問われることは少ない。英語の教員も然りである。

国語の新人教員が生徒をどう叱ったらいいいのかに悩み、英語の新人が生徒が興味を持ちそうな教材に引かれるのはこうした事情からだろう。新人は経験や教養に遅れをとっていると自覚する。生徒は親しみを覚えるが、なんとなく頼りなさを感じる。そこで起こるのは先ほどの梁塵秘抄の授業である。「教員の言うことは取りあえず聞いておく」認識は今の生徒にはない。

「先生は長年女子校に勤められたのだから、女子生徒の叱り方を教えてください」と言った女性教員の台詞が耳に残っている。男子ならまだしも叱れるが、女子を叱るのは難しい、叱った後の対応が思いやられる。そういった切実な思いが伝わってきた。同性同士ということもあり、また最近の高校生は畏れを知らないということもある。「作品」が既に存在しそれを受容する「私」は「作品の美」に感動すべきであるなどというのは、戯言にすぎない。私が拒否するのは私がそう感じるからであり、そう感じる私が存在のすべてであ

る。そう言い切られたとき国語の授業はお手上げになる。英語の教員以上に人間性の陶冶に熱心なのは国語のそのような事情による。

一方で英語や数学はツールの教科である。教えることは山ほどある。生徒が新たに記憶したり、認識したりすべき事柄が山ほどある。露骨に言えばその事柄を強制的に記憶させ、認識させれば事足るが、それでは教育たり得ない。ツールの教科で手法や方法論が盛んであるのは、記憶が難儀であり、認識が難解であるからだ。学習の落ちこぼれは数学や英語に多く、国語や社会を苦手とする生徒は多くはない。まして最近は何ウハウ重視の時代である。ノウハウを覚えればすべてを理解したかの錯覚もある。英語の新人が新たな教材や教え方に興味津津なのは納得するところである。

先にも述べたが、この科目でどうしても押さえなければならない事象の量は多くない。教育実習の意義と臨む際の注意事項や心構えだけで用は足りる。授業量の1/3か半分あればそれらの伝達は済む。問題は心構えをいかに内実化させるかという点であり、そこでコンセンサス学習や、教壇実習に対する模擬授業のが必要になる。コンセンサス学習はゲーム感覚で実習できるが、大切な点は生徒がその集団の中でどのような動きをしているかを知ることが出来ることにある。教育は教えることに集中し、教材開発や方法に目がいくが、方法を生む母体は生徒理解であり、集団内での生徒の動きの知覚である。

ここでの教壇模擬実習は教科教育法とちがって、授業を受ける学生が同じ教科を志向しているわけでない。取りあえず「朝の会」と称して始業の朝礼時のスピーチと道徳の時間の模擬授業をやってみようと思う。。

3分間スピーチは、生徒が元気に一日過ごせるよう、朝礼時に伝達とスピーチをする。何をどう話すかが課題である。時間をかけてよく準備すれば多くは元気よく笑顔で話が出るが、下を向いてぼそぼそと遠慮がちにしゃべる学生もいると予想される。下を向く学生のすべてが準備不足ではなく、資質やその他の要件もあり、ぼそぼそしゃべるのは生徒に元気を与えるどころか、かえってマイナスになる。学生たちに仲間のスピーチを聴いてコメントさせたい。他人のふりを見て自分のスピーチを構成し、よりすぐれたスピーチの仕方を体験させたい。当然だが、よくできたスピーチには他の学生の反応がよい。コメントする事で、そのときの印象を鮮明に記憶し、定着し、今後の授業に生かす事がねらいである。

コメントは話の内容に関するもの、しゃべり方に関するものなど多方面にわたるが、「朝の会」の3分間スピーチでは話の面白さより、話し方の方が大切である。これには私が中学教員時代に生徒に3分間スピーチを実施したときの体験だが、コメントは話の内容に関するものが多く、話し方に言及するものはほとんどない。話し方はコメントしにくいとか、コメントしても一言で終わってしまうとか、評価にあたらぬものとか、その他いろいろなことがあるが、つつい話の内容を聞いてしまい、話し方に注意が向かない事にもよる。話し方への言及はレベルが低く、高次元な理念的なものが学習対象であり、人に話したり語る場合は、高次元内容を伴いそれが人を感動させると考えがちである。しかしこれは人間の伝達機能から見ると、話し方の要素は大きい。

これは話し方のうまい生徒が登場し、教師のコメントとして声や表情話し方に言及すると、その後それに関するコメントが増えたり、注意を向ける傾向にある。コメントも「声大きい」・「表情が明るい」などといったものが現れる。

準備不足で失敗する学生はまだしも、準備もある程度できているのにうまくできない学生がいる。緊張のためあがってしまう。「あがる」のは準備不足のため、内容が自分のものになっていない為、途中で何をし

ているか分からなくなってしまうとか、分析すればそういうことになるが、もともとプレゼンテーションができない学生がいる。一体プレゼンテーションとは何をすることか、自分の意志や気持ちを相手に伝えることと考えると、内容重視で話し方は二義的なものになる。プレゼンの最大の目的は相手をその気にさせること、その気にさせ注視させてから自分の伝えたい内容を伝えることである。

若い頃祖父江省念師の節団説教を聞いたことがあった。実演が終わった後、その説教師のいうに学校の先生はもっと話術に長けるべきだと主張した。確かに話の内容は単純で誰でもが結末を予想でき、展開も月並みで安心して聞くことができたが、聞かせるとすれば声の調子や間合いなど話術そのものであった。話芸と呼ばれるようなものは、何度も上演され誰もが承知している内容である。演劇も然りであるが、ここでは内容を問うのではなく、どう演ずるかを問う。芸人の腕は既定の事象に個をどう表現するかにある。すでに定まっている物語を改変すれば聴衆は裏切られた気持ちにもなる。

「話す」ことは容易なことではない。単なるおしゃべりとは違う。おしゃべりは気のあった友達同士で和気あいあいとした雰囲気とするものだが、教壇で話すときは、生徒は不特定多数であり教師が何と話すかに興味津々であり、自分の価値観と合わないと思う気もなくしてしまう。また教室で話す内容は生徒の期待する「学校文化」に見合ったものでなければならない。「学校文化」には道徳的なものである必要があり、また月並みでありきたりのお説教では用をなさない。学校では何をすべきか、生徒とはどういう存在か、はたまた「朝の会」はどういう意味で設定されているのかの理解が必要である。冒頭、実習の理念と注意事項をすれば事足りると言ったが、教育の理念と概念を実践演習する授業である。

朝の会では学校的価値＝既定の価値を繰返しアナウンスすればいい。みんな仲良くとか、共同の精神を訴えろとか、元気に実りある学校生活を送ろうとかであり、それをいうに生徒が興味を持ちそうな例示で単純明快に訴えることである。私事で表現するのは押しつけになり、誰もが経験しているようなこと、共通体験で肉付けすることである。「私が経験」した特別な話ではなく、自他ともにすでに充分了解している筋道の話に、自分の声を使って気持ちをのせていけばよい。

スピーチの内容は、自分を語っておしまいでは生徒は聞いてくれないし、共感しない。自分の価値観をむりやり押し付けても仕方がない。生徒が興味を持ちそうな話を探し、どこにでもある身近なトピックが必要である。国語は教科書の文を使って自分を語る授業であるが、英語は自分の文化ではない言語を自分の言語に翻案する。他を通さないと表現できない教科であり、自己表現も他を通して表現すべきであろう。

道徳の模擬授業でも然りである。リード文を使って授業をする場合でも例えば「百人の村」で、ゲーム性を取り入れながら授業を展開した方がよい。受講する学生が50人ならば数値を半分に減らして、それにあたる学生を教室のなかで移動させ数値を実感させるなど、自分たちがいかに恵まれているかなど実感させる授業をする。しかし、リード文を用いると多くはリード文の読解をし、道徳というより心理を読みとる国語に似た授業を行ってしまいがちである。当然学生も国語の授業ではないからこういう授業はそぐわないという反応はするだろうが、また多くはその辺を理解しているのだが、いざ授業となるとそういう発想になってしまう。事柄に向かって授業を進めるのか、いきなり自己を語りだすかの違いであろうか。

どういう形の授業がいいのか、私の方からのコメントはなるべく控え、学生が模擬授業をしたり見たりした感想や印象から自身の授業を組み立てる事を期待したい。その方が学生の体得は容易になると思われる。プレゼンテーションができない学生は、相変わらずできないし、多少とも意識のある学生は、模擬授業をし

たり見たりして成長できる。これもどこを見ればいいのかの切り込み方が理解できればよい。これを暗黙値の理解とすれば、経験が自己を成長させるのだが、プレゼンテーションができない学生はその見所、勘所を押さえることができないでいる。

学生は往々にして時私の方から生徒との接し方のプリントを配布すると一生懸命に読む。そしてこの事を知らなかった、今はじめて気がついたと感動する。活字で世界を切り取り、その事に場面を限定しての生徒理解はできるが、現在進行形の現象は自分で対象を切り取り、問題点を明確にし処理しなければならない。これは自分の今ある位置と、全体との関係を掴む必要がある。緊張のため「あがる」学生は自己とおかれた世界との関係を掴めないが、プレゼンの下手な学生は、あがる・あがらないに関わらず、それができないのではないか。自己を訴える事に終始し、相手の状態にまで気が回らない。相手が今どのようにあるかを掴み、その上で自己の表現方法を選択する。そのことができないままではいるのではないかと思われる。

対象が限定されれば、対応の方法は自ずから見えてくる。しかし、予期に反する対象であったり、予期していた範疇でも実際とはちがっていたりすると、パニックに陥るのはありがちである。活字の世界では対象は限定され、明確に捉えられ不動のものである。現実には対象のありようは不確実であり流動的である。不確実で常ならざる対象を推測し、その推測に基づいての行為であり、刻々変化する対象に正確に反応することである。

学生同士を対象にした模擬授業では変化の振幅や不確実性は、実際の授業に比べてずいぶんと少く、また教師役の学生にずいぶんと協力的であり、実習で経験するのは事情を異にするが、それでも予想に反する事は多々ある。生徒役の学生は協力的であり、知識もあり、同じ思考をする者同士であると言う前提で、実際の授業を想定する事である。私は教職の授業で学生に「教職課程で学んだ事はあまり役に立たない」というが、たいていの学生は怪訝な顔をし、ならばなぜこの授業をするのか、また役に立つ授業にしないのかという顔を見せる。役に立たないとはこの辺の事情からいうのだが、実際の授業を模擬授業から想定できれば、実習授業の場合でも充分役に立つであろう。

今年実際に教壇に立った卒業生が、実習時のクラスと実際に教員になってからのクラスとは対処の仕方がまるで違うと実感したようだ。実習時は指導の教員に従い、それをなぞればよい。しかし最大の違いは、実習時の出来上がったクラスで指導教員の指導のもとでする授業は、指導教員の意を汲んだ授業を展開すればいいが、教員は4月当初クラスを貰った時点で自分のクラスを構築しなければならない。クラスの構築に失敗するととんでもない1年が待っている、というのである。教育実習もそういう意味では実際の教育ではなく、指導教員が構築した流れの中で生徒との付き合い方を経験するだけだ。

授業に形はない。あるとしても瞬時に姿を変え、絶えず姿を変える流動的なものである。たとえばオーケストラのようなものだ。楽器の奏者が生徒であり、指揮者が教師である。楽譜は両者が共有するが、楽譜には個々がなすべき事の記載はあるが、内容についての解釈や方向性の記載はない。解釈や方向性は教師自らが生徒のありようを見て瞬時に判断する。